

大学生のアパシー傾向と理想自己の関係について

札幌学院大学大学院 臨床心理学研究科 修士課程 伊 東 美 波

要 約

本研究では、近年問題視されつつある若者の無気力（アパシー）傾向と若者の理想とする自己像（以下、理想自己）の関係性を明らかにすることを目的とした。大学生170名を対象に、鉄島（1993）のアパシー傾向測定尺度と溝上（1999）の自己評価尺度を施行し、両尺度の相関結果を検討した。その結果、相関の結果に男女の違いが見られ、女性にのみ複数の有意な負の相関が示された。また、理想自己に関する自由記述の内容をカテゴリに分類し、アパシー傾向が高い者と低い者との間で内容に違いがあるのかを検討した。その結果、アパシー傾向が低い者はより現実的で明確な理想自己を思い描くのに対して、アパシー傾向が高い者は「積極性」や「優しさ」、「容姿の良さ」など内容が抽象的であり、また他者評価に依存する傾向が高く、内発的動機付けが十分になされていないことが示唆された。

キーワード：アパシー傾向 大学生 理想自己

I. 問題と目的

1. 若者のアパシー傾向について

近年、若者の無気力傾向がさまざまな形で論じられている。具体的な事例としては、“職場では調子が悪くなるが、趣味の世界では別人のように元気になることがあり、休養中に海外旅行に出かける”（見波，2011）といった職場における不適応が多く、このような職場での不適応の背景にはうつ病、とりわけ従来のうつ病とは異なる傾向の「新型うつ病」があるという見解がある。

この「新型うつ病」は、まずマスメディアによると、従来のうつ病に対する理解の枠組みでは捉えきれない現代の若者の特有の症状であるとされているが、そこにはこれらの若者に対する否定的なまなざしも見え隠れする。林(2011)は、「新型うつ病」とほぼ重なる症状について「擬態うつ病」と概念化し、性格の弱力性に起因する適応障害であるとしている。この無気力傾向について、林は人格の未熟性や依存的傾向と関連づけて論じているが、これはマスメディアにみられる論調と共通

している。これらの議論では、学問的定義が不透明なままに主観的な意見が述べられている。無気力を若者個人の問題へと還元することに留まっており、なぜ若者が無気力に陥っているのかについての問いが欠けていると言える。

2. 若者の「新型うつ」と「スチューデント・アパシー」の関連について

先述のとおり、「新型うつ病」や「擬態うつ病」という概念は若者の特徴を曖昧なままに捉えているにも関わらず、広く受け入れられているという現状がある。しかし、それらの概念で取り上げられている「回避傾向」および「自己愛傾向」は、1970年代ごろより提唱されてきた「スチューデント・アパシー」（笠原，1976）において指摘されてきた特徴と重なる。「スチューデント・アパシー」とは、無気力や目的意識の喪失（アイデンティティの拡散）、学業などの本業からの選択的退却・逃避といった特徴をもつ学生特有の概念として提唱されてきた。また土川（1990）は、「ス

チューデント・アパシー」をⅠ型（受身回避型）とⅡ型（自己愛型）に分類しており、このような分類からも回避的で自己愛的といった近年指摘されている若者の特性と重なる点が多いとの指摘がある（傳田，2009）。以上の点から，本研究では近年指摘されている若者の「新型うつ」は，従来大学生において指摘されてきた「スチューデント・アパシー」という概念の延長線上で捉える事のできるものであると考えられる。

3. 回避傾向と理想自己の関連について

新型うつやスチューデント・アパシーにおいて指摘されている回避傾向については，“職場や学校など，自分の評価が社会的に決定される場所でもっとも強まる”と指摘されている（香山，2008）。また，青年期は理想とする自己（以下，理想自己）と現実の自己とのズレが生じやすく，不適応傾向が増大する時期であると指摘されている（遠藤，1991）。これらの先行研究より，若者は，他者からの評価だけではなく，自分自身が思い描く理想自己と現実の自己との違いに敏感であり，理想自己と現実の自己との間にズレが生じた際にはそれを受け入れられず，回避傾向が高まることが想定される。しかしながら，このように理想自己と現実自己の不一致を取り上げた論文はいくつかある一方で，理想自己の具体的な内容について取り上げた論文は少なく，若者の理想自己の具体的なあり方について検討する必要があると思われる。

本研究の目的

先述した背景をふまえ，本研究では，近年指摘されている若者の無気力を「スチューデント・アパシー」と連続する心性（以下，アパシー傾向）であると捉え，このアパシー傾向について単に個人の弱力性の表れとして理解するのではなく，そのような状態に至る背景を探ることを目的とする。そのための第一歩として，若者の動機づけとの関係に着目していく。特に本研究では，動機づけの要因の一つとして理想自己とアパシー傾向との関連に焦点を当てることとした。

手続きとしては，はじめに，自己評価の高さがアパシー傾向に関連しているかを検討し，次に，

アパシー傾向が高い者と低い者の間で，理想自己の内容を比較・検討し，アパシー傾向を高める要因として考えられる理想自己の内容を明らかとすることを目的とした。

Ⅱ. 方 法

調査時期 2012年10月

調査協力者 北海道内の私立大学に通う学生を対象に，大学の講義の前後に質問紙調査を実施した。そのなかで，回答に記入漏れがない170名の回答を結果として処理した。170名の内訳は，男性86名，女性84名，平均年齢19.5歳，標準偏差±1.29歳であった。また，本調査を実施するにあたり，調査協力者には質問紙の内容は統計的に処理されるため匿名性が保たれることを十分に説明したうえで質問紙とともに配布した調査協力同意書への記入を求めた。

調査内容 大学の講義の前後に質問紙と調査研究同意書を配布し，調査を行った。質問紙は，2つの尺度と自由記述項目で構成されたものを実施した。詳細は以下のとおりである。

1. アパシー傾向測定尺度

アパシー傾向を測定するため，鉄島（1993）の「アパシー傾向測定尺度」を用いた。本尺度は「授業からの退却」，「学業からの退却」，「学生生活からの退却」の3つの下位因子項目で構成されており，全31項目の質問項目の回答を1点（まったくあてはまらない）から6点（よくあてはまる）の6段階評定で求めた。

2. 自己評価尺度

溝上（1999）による自己評価尺度は，4つの下位因子項目「個人基準肯定的自己評価因子」，「社会基準肯定的自己評価因子」，「個人基準否定的自己評価因子」，「社会基準否定的自己評価因子」で構成された全28項目の尺度である。アパシー傾向尺度と同様，6段階評定での回答を求めた。

3. 理想自己に関する自由記述項目

水間（2002）の理想自己に関する調査を参考に，なりたいたい自分（以下，正の理想自己）となりたく

ない自分 (以下、負の理想自己) を3つずつ書き出してもらう形で回答を求めた。正の理想自己は“なりたい理想の自己像”である一方で、負の理想自己は、“なりたくない自分”であり、これは理想自己と現実自己のズレを自覚させる基準であると思われる。本研究では、正の理想自己と負の理想自己の両方を検討することで、若者の自己イメージへの理解をより深めることを目的とした。

分析方法

1. アパシー傾向尺度と自己評価尺度の相関について

アパシー傾向尺度と自己評価尺度の総得点および下位因子項目の得点をそれぞれ算出し、ピアソン(Pearson)の相関係数を算出した。またその際、調査協力者170名すべての回答の検討に加えて、性別ごとの検討を行った。分析には IBM SPSS Statistics22 を使用した。

2. 自由記述内容による理想自己のカテゴリ分類

質問紙の自由記述項目である正の理想自己と負の理想自己の内容を分類し、カテゴリを生成した。分類手順は以下のとおりである。はじめに、自由記述項目の内容を抜き出し、1つずつカードに書き出した(カード化)。次に、カード化したものを、それぞれの内容の類似性により一時的にまとめ、グループを編成した。また、ここでの類似性とは、自由記述内容の意味合いが近いもの同士を指している。グループ編成されたそれぞれのグループを他のグループと比較し、他のまとめ方はないか検討した。問題がないと思われたグループにカテゴリ名を付けた。最後に、カテゴリ名を見比べ、より意味合いが近く、類似したものを集めてカテゴリの編成を再度検討した。

3. アパシー傾向による群間比較

アパシー傾向尺度における総得点の平均値を算出し、平均値より上の総得点の者をアパシー傾向「高群」、平均値より下の総得点の者をアパシー傾向「低群」として群分けした。そして、各群の協力者が、自由記述により生成された各カテゴリに属す場合は(1)、属さない場合は(0)としてそれ

ぞれ数値を付し、その出現度数をもとに χ^2 検定により高低群の差を比較した。ひとつのカテゴリにおいて同一の調査者の記述データが複数含まれる場合には、それらに対して複数の度数は与えず、あり(1)として算出することで、特定の調査協力者による影響を受けないよう考慮した。また、各群の男女を分け再度、各カテゴリの χ^2 検定を行い、男女ごとの結果について検討した。

4. 性別ごとのアパシー傾向と理想自己との関係について

アパシーを提唱した Walters (1961) は、アパシーを男性特有の青年期発達の障害と概念付けている。しかしながら、近年指摘されている「新型うつ病」や「擬態うつ病」においては、女性の事例が多く報告されており、このことから、先述した分析手順において、性別ごとの検討も行うこととした。

Ⅲ. 結果と考察

1-1. アパシー傾向と自己評価の相関について

はじめに、アパシー傾向尺度と自己評価尺度に回答した170名のデータの平均値と標準偏差を表1に示す。次に、アパシー傾向尺度と、自己評価尺度の総得点および下位因子項目におけるピアソン(Pearson)の相関係数の算出結果を表2に示す。結果として、アパシー傾向尺度の下位因子項目である「学業からの退却」は、自己評価尺度の「個人基準否定的自己評価因子」を除く、すべての下位因子項目と総得点との間に有意な負の相関が示

表1. 各尺度の総得点および各下位因子項目の平均値および標準偏差 (SD)

(N=170)		平均値 (SD)
アパシー傾向尺度	授業からの退却	33.18(10.67)
	学業からの退却	44.63(8.78)
	学生生活からの退却	21.5 (4.84)
	総得点	99.31(18.16)
自己評価尺度	個人-肯定	27.05(7.03)
	社会-肯定	12.48(4.51)
	個人-否定	19.40(5.38)
	社会-否定	16.24(4.93)
	総得点	75.16(17.33)

表2. アパシー傾向尺度と自己評価尺度の相関結果

(N =170)		自己評価尺度				自己評価 総得点
		個人-肯定	社会-肯定	個人-否定	社会-否定	
	授業からの退却	.077	.137	.045	.050	.095
アパシー	学業からの退却	-.230*	-.320**	-.012	-.183*	-.232**
傾向尺度	学生生活からの退却	-.310**	-.131	-.185*	-.268**	-.294**
	アパシー傾向 総得点	-.149	-.109	-.028	-.130	-.135

** .1%水準で有意 (両側)

* .5%水準で有意 (両側)

された。また、「学生生活からの退却」において、「社会基準肯定的自己評価因子」を除く、自己評価尺度すべての下位因子項目および総得点との間に有意な負の相関が示された。

1-2. 性別ごとの検討

調査協力者170名の回答を男女に分け、性別ごとに結果を検討した。はじめに、男女ごとの平均値を算出し、その差をt検定により検討した。その結果、アパシー傾向尺度において男女間に有意な差が示されなかった一方で、自己評価尺度にお

いては、下位因子項目「個人基準否定的自己評価因子」と自己評価尺度の総得点において男女の回答に有意な差が見られた(個人基準否定的自己評価因子: $t=2.57$, $p<.05$, 男性>女性, 自己評価総得点: $t=2.45$, $p<.05$, 男性>女性)。結果を表3に示す。

また、性別ごとにアパシー傾向と自己評価のピアソン(Pearson)の相関係数を算出し検討した結果、男性は有意な相関が見られたのに対し、女性においては、いくつかの有意な相関が示された。男女それぞれの結果を表4、表5に示す。女

表3. 性別ごとの平均値および標準偏差とt検定結果

(N=170)		Male (N=86)	Female (N=84)	t 値	結果
		平均値(SD)	平均値(SD)		
アパシー 傾向尺度	授業からの退却	34.53(11.2)	31.79(9.97)	1.69	
	学業からの退却	44.26(8.44)	45.01(9.16)	-0.56	
	学生生活からの退却	21.51(4.4)	21.49(5.28)	0.32	
	アパシー総得点	100.3(18.07)	98.29(18.3)	0.723	
自己評価 尺度	個人-肯定	28.01(7.48)	26.07(6.44)	1.81	
	社会-肯定	13.14(4.85)	11.8(6.06)	1.96	
	個人-否定	20.43(5.83)	18.35(4.69)	2.57	*
	社会-否定	16.76(5.32)	15.7(4.47)	1.4	
	自己評価総得点	78.34(18.4)	71.92(15.61)	2.45	*

* .5%水準で有意 (両側)

表4. 男性におけるアパシー傾向尺度と自己評価尺度の相関結果

Male (N=86)		自己評価尺度				自己評価 総得点
		個人-肯定	社会-肯定	個人-否定	社会-否定	
	授業からの退却	.168	-.161	.047	.130	.163
アパシー	学業からの退却	-.105	-.198	.019	-.058	-.106
傾向尺度	学生生活からの退却	-.210	-.127	-.124	-.126	-.194
	アパシー傾向 総得点	.005	-.024	.009	.023	.005

表5. 女性におけるアパシー傾向尺度と自己評価尺度の相関結果

Female (N=84)		自己評価尺度				自己評価 総得点
		個人-肯定	社会-肯定	個人-否定	社会-否定	
	授業からの退却	-.085	.064	-.016	-.090	-.049
アパシー	学業からの退却	-.363**	-.457**	-.030	-.320**	-.369**
傾向尺度	学生生活からの退却	-.426**	-.143	-.265*	-.425**	-.414**
	アパシー傾向 総得点	-.350**	-.225*	-.101	-.332**	-.331**

** .1%水準で有意 (両側)

* .5%水準で有意 (両側)

性は、アパシー傾向尺度の総得点において、自己評価尺度の「個人基準否定的自己評価因子」を除くすべての下位因子項目および総得点との間に有意に負の相関が示された。また、「学業からの退却」においても同様に「個人基準否定的自己評価因子」を除くすべて、下位因子項目および総得点との間に有意な負の相関が示された。「学生生活からの退却」においては、「社会基準肯定的自己評価因子」を除くすべての下位因子項目および総得点との間に有意な負の相関関係が示された。

1-3. アパシー傾向と自己評価の相関についてのまとめ

本研究では、はじめにアパシー傾向測定尺度と自己評価尺度との相関を検討した。その結果、「授業からの退却」と自己評価尺度との間には有意な相関が示されなかった一方で、「学業からの退却」および「学生生活からの退却」と自己評価尺度との間には有意な相関が示された。このことから、アパシー傾向と自己評価の関連は、学業や学生生活といった内発的動機づけが重要となる場面でのみ見られることが示唆された。鉄島(1993)は、「学業からの退却」は進学動機の曖昧さ・消極さと関連があり、「学生生活からの退却」は、その根底に同一性の探求という大きな問題が散在していると述べている。この点をふまえても、若者のアパシー傾向は、内発的動機づけの有無と関連があり、重要な場面において内発的動機づけが得られなかった際には自己評価へと影響を及ぼすことが考えられる。

また、アパシー傾向と自己評価の性別ごとの結果を検討した結果、女性にのみに有意な相関が示

された。このことから、近年の若者のアパシー傾向は男性特有の特徴とは言い難く、女性においても自己評価との関連で見られやすいものであることが示唆された。

2-1. 自由記述項目による正の理想自己のカテゴリ分類結果

回答より抜き出した正の理想自己の記述データ数は450であり、分類に際しては記述内容の多様性を考慮し、溝上(2001)と山田(2004)のカテゴリを参考に4つ上位次元カテゴリと14の下位次元カテゴリに編成した。4つの上位次元カテゴリは、『自己の特徴』、『自己・世界へのかかわり』、『他者・人間関係』、『対他者態度』であった。

①『自己の特徴』は、「冷静・落ち着き」、「知識」、「才能・能力」、「面白さ」、「容姿が良い人」の下位カテゴリを含み、自身の性格や能力および外見に関する理想を示した記述としてまとめた。

②『自己・世界へのかかわり』は、「熟考・柔軟性」、「計画性」、「正直さ」、「積極性」、「自分に厳しい人」、「自己確立」と、物事への取り組む姿勢や、他者への関わり、またはその態度に関する理想の記述であった。

③『他者・人間関係』は、「好かれる人」、「信頼性」、「ソーシャルスキル」と他者との人間関係を表しているカテゴリである。特徴として好かれない、信頼されたいなど他者からの評価を基準とする受け身な態度がうかがえた。

④『対他者態度』は、「優しさ」を示すカテゴリであり、①『自己の特徴』や、②『自己・世界へのかかわり』と重なりがあるように思われるカテゴリだが、他者に対する献身的な態度が極めて

目立ち、記述データの数も多かったことから単一のカテゴリとして編成した。

2-2. 自由記述項目による負の理想自己のカテゴリ分類結果

負の理想自己の記述データ数は431であり、4つの上位次元カテゴリと16のカテゴリにまとめられた。またそのうち6つのカテゴリは、正の理想自己と同様のカテゴリ名で編成されており、対義語を多く含んだカテゴリとしてまとめられた。上位次元カテゴリは正の理想自己と同様に、『自己の特徴』、『自己・世界へのかかわり』、『他者・人間関係』、『对他者態度』である。

①『自己の特徴』は「性格」、「知識」、「金銭」、「容姿」について挙げられており、「性格」においては詳細な記述はなく、「性格が悪い」など抽象的な記述が目立った。

②『自己・世界へのかかわり』は、「依存」、「熟考・柔軟性」、「暴力的」、「嘘をつく」、「ネガティブ」、「雰囲気・空気」、「マナー・モラル」、「自己確立」、「非難する」、「無気力」と多くの下位カテゴリを含み、自分自身のあり方や関わり方についての記述が見られた。

③『他者・人間関係』は「嫌われる人」を示すカテゴリであり、内容としては、「嫌われ物や後ろ指をさされる人」などがあり、その内容は抽象的なものが多く見られた。

④『对他者態度』は、「自己中心的」な態度を示すカテゴリであり、関わりや考え方ではなく、他者への態度が自己中心的であるという記述を多く含む特徴が見られた。

3-1. 正の理想自己におけるアパシー傾向の群間比較

はじめに、アパシー傾向尺度における総得点の平均値を算出し、平均値より上の得点の協力者を「高群」、平均値より下の得点の者を「低群」とし、群分けした。そして、自由記述の内容から編成された14の下位次元カテゴリに属している各群の調査協力者の数を算出し、属している場合は(1)、属さない場合は(0)とそれぞれ数値を付した。最後に、 χ^2 検定により高低群の群間比較を行った。

正の理想自己における χ^2 検定の結果、「熟考・柔軟性 ($p < .01$, 高群 < 低群)」、「積極性 ($p < .05$, 高群 > 低群)」、「優しさ ($p < .05$, 高群 > 低群)」の3つのカテゴリにおいて「高群」と「低群」との間に有意な差が見られた。このことからアパシー傾向「低群」の者は「熟考・柔軟性」を理想とするのに対して、アパシー傾向「高群」の者は「積極性」や「優しさ」を理想とすることが示唆された。また、有意な偏りは示されなかったが、「容姿が良い」や「正直さ」、「好かれる人」においても高群・低群のあいだで一定の差がみられた。各カテゴリそれぞれの結果は表6に示すこととする。

3-2. 正の理想自己における性別ごとの検討

性別ごとの結果を検討するために、各カテゴリにおけるデータを男女に分け、再度 χ^2 検定を行った。その結果、男性では「熟考・柔軟性 ($p < .05$, 高群 < 低群) および「優しさ ($p < .01$, 高群 > 低群)」のカテゴリにおいて高低群の有意な差が見られた。結果を表7に示す。また、女性におい

表6. 正の理想自己における χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=92)	低群 (N=78)	結果
①※	冷静	12	13	
	知識	10	8	
	才能・能力	9	7	
	面白さ	7	6	
	容姿が良い人	9	3	
②	熟考・柔軟性	3	16	**
	計画性	13	13	
	正直さ	12	3	
	積極性	38	17	*
	自分に厳しい人	8	10	
	自己確立	21	23	
③	好かれる人	5	10	
	信頼性	8	11	
	ソーシャルスキル	20	29	
④	優しさ	52	29	*

※上位カテゴリ：①自己の特徴、②自己・世界の関わり方、③他者・人間関係、④对他者態度

** .1%水準で有意 (両側)

* .5%水準で有意 (両側)

表7. 男性における正の理想自己 χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=46)	低群 (N=40)	結果
①※	冷静	7	4	
	知識	4	6	
	才能・能力	9	5	
	面白さ	5	4	
	容姿が良い人	2	3	
②	熟考・柔軟性	1	7	*
	計画性	4	7	
	正直さ	7	1	
	積極性	11	8	
	自分に厳しい人	3	4	
	自己確立	12	12	
	③	好かれる人	2	
信頼性		4	9	
ソーシャルスキル		10	14	
④	優しさ	32	11	**

※上位カテゴリ：①自己の特徴，②自己・世界の関わり方，③他者・人間関係，④對他者態度

** .1%水準で有意 (両側)

* .5%水準で有意 (両側)

表8. 女性における正の理想自己 χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=46)	低群 (N=38)	結果	
①※	冷静	5	9		
	知識	6	2		
	才能・能力	0	2		
	面白さ	2	2		
	容姿が良い人	7	0		*
②	熟考・柔軟性	2	9	*	
	計画性	9	6		
	正直さ	5	2		
	積極性	27	9		**
	自分に厳しい人	5	6		
	自己確立	9	11		
	③	好かれる人	3		6
信頼性		4	2		
ソーシャルスキル		10	15		
④	優しさ	20	18	*	

※上位カテゴリ：①自己の特徴，②自己・世界の関わり方，③他者・人間関係，④對他者態度

** .1%水準で有意 (両側)

* .5%水準で有意 (両側)

では「容姿が良い人 ($p < .05$, 高群 > 低群)」と「熟考・柔軟性 ($p < .05$, 高群 < 低群)」, 「積極性 ($p < .01$, 高群 > 低群)」カテゴリにおいて高低群の間に有意な差が見られた。結果を表8に示す。

3-3. 負の理想自己におけるアパシー傾向の群間比較

負の理想自己においても正の理想自己と同様の手順で、アパシー傾向「高群」および「低群」の群間比較を行った。その結果、「嫌われる人」のカテゴリにおいてのみ有意な差が示された ($p < .05$, 高群 > 低群)。このことから、アパシー傾向「高群」の者は「低群」に比べ、他者との人間関係を意識していることが示唆された。また、有意差は示されなかったが「性格」・「熟考・柔軟性」・「嘘をつく」・「ネガティブ」・「空気を読む」・「マナー・モラル」・「無気力」においても、高群・低群の間に一定の差がみられた。結果の詳細は表9を参照されたい。

表9. 負の理想自己における χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=92)	低群 (N=78)	結果
①※	性格	13	6	
	知識	5	3	
	金銭	6	2	
	容姿	6	2	
②	依存	2	5	
	熟考・柔軟性	12	7	
	暴力的	7	9	
	嘘をつく	5	12	
	ネガティブ	12	7	
	雰囲気・空気	8	13	
	マナー・モラル	11	17	
	自己確立	14	11	
	非難する	15	15	
	無気力	33	26	
③	嫌われる人	18	5	*
④	自己中心的	44	48	

※上位カテゴリ：①自己の特徴，②自己・世界の関わり方，③他者・人間関係，④對他者態度

* .5%水準で有意 (両側)

3-4. 負の理想自己における性別ごとの検討

正の理想自己と同様の手順で、負の理想自己においても性別ごとの検討を行った。その結果、男性においては「性格」・「空気を読む」・「批難する」・「無気力」のカテゴリにおいて一定の差異は見られたが、有意な高低群の差としては見られなかった。結果を表10に示す。また、女性においては、「熟考・柔軟性」・「ネガティブ」・「批難する」・「自己中心的」のカテゴリにおいて一定の差異が見られたが、男性の結果同様、有意な差ではなかった。結果を表11に示す。

3-5. 理想自己に関するまとめ

質問紙調査に含まれる自由記述項目では、アパシー傾向を高める要因として考えられる理想自己の内容を明らかとすることを目的とした。理想自己の内容をアパシー傾向「低群」・「高群」に分けその違いを検討した結果、アパシー傾向が低い者は、「柔軟性」や「熟考」など、自分自身の内面を捉えた内容を理想自己として重要視していることが示唆された。それに対して、アパシー傾向が高い者は、男性においては「優しさ」を重視し、

女性においては「容姿の良さ」や「積極性」を理想として重視していることが示唆された。また、男女ともに「嫌われる人」にはなりたくないとの理想自己を示していた。このことから、アパシー傾向が低い者は、より現実的で具体的な理想自己を抱いており、内発的動機づけが十分にある内容であったのに対し、アパシー傾向が高い者は、「優しい」や「かわいい」など、他者の評価に依存した理想自己を抱きやすいことが示唆された。また、その内容は他者の評価を基準としているため、内容自体も抽象度が高く、理想自己に近づくための手段が不明確であることが推察された。

IV. 最後に

本研究では、はじめにアパシー傾向と自己評価との関係を明らかにし、次に理想自己の内容をアパシー傾向が高い群と低い群で比較することで、アパシー傾向を高める要因を検討することが目的であった。アパシー傾向尺度と自己評価尺度の相関をもとにそれらの関係を検討した結果、男性はアパシー傾向において自己評価との関係はなく、無気力な行動が自己評価に反映されない傾向があ

表10. 男性における負の理想自己 χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=46)	低群 (N=40)	結果
①※	性格	9	2	
	知識	2	3	
	金銭	4	1	
	容姿	1	0	
②	依存	2	4	
	熟考・柔軟性	3	4	
	暴力的	3	4	
	嘘をつく	2	5	
	ネガティブ	1	3	
	雰囲気・空気	5	11	
	マナー・モラル	3	10	
	自己確立	7	5	
	非難する	4	11	
	無気力	23	12	
③	嫌われる人	8	2	
④	自己中心的	22	18	

※上位カテゴリ：①自己の特徴、②自己・世界の間わり方、③他者・人間関係、④對他者態度

表11. 女性における負の理想自己 χ^2 検定結果

	下位カテゴリ	高群 (N=46)	低群 (N=40)	結果
①※	性格	4	4	
	知識	3	0	
	金銭	2	1	
	容姿	5	2	
②	依存	0	1	
	熟考・柔軟性	9	3	
	暴力的	4	5	
	嘘をつく	3	7	
	ネガティブ	11	4	
	雰囲気・空気	3	2	
	マナー・モラル	8	7	
	自己確立	7	6	
	非難する	11	4	
	無気力	10	14	
③	嫌われる人	10	3	
④	自己中心的	22	30	

※上位カテゴリ：①自己の特徴、②自己・世界の間わり方、③他者・人間関係、④對他者態度

るが、女性は反映される傾向にあり、その背景として内発的動機づけの有無が関係していることが示唆された。

理想自己の内容に関しては、アパシー傾向が低い者はより現実で具体的な理想自己を持ち、その内容は内発的動機づけによるものであることが示唆された。一方、アパシー傾向が高い者の理想自己の内容は抽象的であり、その内容も他者からの評価に依存したものであった。

以上の結果から、本研究では若者のアパシー傾向の背景要因として、これまで指摘されてきた個人の脆弱性や自己愛的な性格の問題ではなく、過度に他者評価に依存した自己像や、具体性に欠け抽象的な理想自己がアパシー傾向に関係していることが示唆された。

今後の課題としては、アパシー傾向と動機づけとの関係についてより質的な検討も視野に入れ、より踏み込んだ検討が必要であると言える。

付 記

本論文は、平成25年度札幌学院大学人文学部臨床心理学科の卒業論文の一部を加筆・修正したものである。本論文を投稿するにあたり、懇切丁寧なご指導を賜りました札幌学院大学臨床心理学研究科村澤和多里准教授に心より深謝申し上げます。

文 献

- 傳田建三(2009)：若者の「うつ」-「新型うつ病」とは何か ちくまプリマー新書。
 遠藤由美(1992)：自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究第63巻第3号。
 林公一 (2011)：擬態うつ病/新型うつ病-实例からみる対応法 保健同人社。
 広瀬徹也 (2006)：逃避型抑うつ 精神療法第32巻第3号。
 笠原嘉 (1988)：退却神経症-無気力・無関心・無快楽の克服- 講談社。
 香山リカ (2007)：仕事でだけ《うつ病》になる人たち 講談社。
 見波利幸 (2011)：「新型うつ病」な人々 日経プレミアムシリーズ。

- 溝上慎一 (1999) 自己の基礎論 実証的心理学パラダイム 金子書房。
 溝上慎一 (2001)：大学生の自己と生き方 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版。
 水間玲子 (2002)：理想自己を志向することの意味 青年心理学研究第14号。
 生地新 (2000)：現代の大学生における自己愛の病理 心身医学第40巻第3号。
 鉄島清毅 (1993)：大学生のアパシー傾向に関する研究 教育心理学研究第41巻第2号。
 土川隆史 (1990)：スチューデント・アパシー 同朋舎出版。
 張賢徳 (2010)：最先端医療の現場から3-うつ病新時代 その理解とトータルケアのために平凡社。
 Walters, P. A. J. (1961)：Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C. C. (ed) Emotional Problem of the Student Appleton-Century-Crofts. (石井完一郎他 (監訳)：学生の諸問題 文光堂。)
 山田剛史 (2004)：理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究第12巻第2号。